

ディケンズの暗い小説と未だ語られざる物語  
*Little Dorrit* における恋愛ロマンスの役割について

中島 剛

ディケンズの長編小説の中で最も内容が緊密で、作品の調子が統一されているという意味で、*Little Dorrit* は最高の完成度を持った作品といえる。同時に作品は、全体の暗さの奥に多くの複雑で多様なイメージ、あるいは象徴を内包していて、今世紀後半以降批評家の注目を浴びることも多くなってきた。象徴に満ちたこの暗い作品について、既 1941 年に Edmund Wilson が *The Wound and The Bow* に収録された一章 “The Two Scrooges” で作品に現われる “imprisoning states of mind” (47) を指摘しているが、その後 Lionel Trilling を経て J. Hillis Miller や Elaine Showalter と、より詳細で高度な分析が加わるようになってきた。<sup>1</sup> その一方、こういった象徴がもたらす作品の暗さは、ディケンズが関心を抱いていた「都市」との関連を視野に置いた研究<sup>2</sup> あるいは The Circumlocution Office や Mr. Merdle の裏にある当時の社会情勢と、作品との関連を探る歴史的視点を持つ研究により、多彩に、より深く理解されるようになったといえる。<sup>3</sup>

だが、これらの批評とは別に、ディケンズ個人の歴史の中で *Little Dorrit* が占める位置を見逃してはならない。小説が月刊連載 (1855 - 57) されていた最中の 1856 年、彼はかつて若い時、いつかはこんな場所に住んでみせる、と心に誓った邸宅 Gad's Hill Place を購入している。成功者としての人生の象徴である家を買ひ、作家として前作 *Bleak House* 同様に完成度が高い *Little Dorrit* を創作できた。だが、その一方で、表題のヒロインの結婚で締め括られる、静かな幸福感の残る *Little Dorrit* とは裏腹に、実際のディケンズの結婚はすでに末期状態であり、妻 Catherine との不仲は明らかであった。<sup>4</sup> 更に、*Great Expectations* の Estella 等、本作後の作品に見られる、性格が強く精神的に自立した女性を作家が描くようになる契機になったと思われる女性、Ellen Ternan とのディケンズとの出会いも、この作品 *Little Dorrit* の刊行すぐ後のことだった。言い換えれば、旧来あまりに天使のようなイメージで、実在感のないと不評だった作家のヒロイン像が終末を迎えるに至る最後の作品、忍従する女性が結婚という形で報われる小説パターンが、最も円熟し人生に醒めた状態のディケンズによって描かれた最後の結果として、*Little Dorrit* を考えることも可能といえるだろう。ロマンチックな恋愛に抱いた憧れの気持ちかもはや持てなくなった後の、新しい恋愛を経験して人生を変えられてしまう前の中年男性が、ラブロマンスに何を見たのか、恋愛にどのような意味を小説に与えたか、考察してみたい。

1 : 結婚と経済

先に述べたように、*Little Dorrit* の結婚で終わる最後のシーンは静かな印象が読者に伝わる事実を、以下の引用で確認しておく。これは、作者の醒めた心の反映であるとも想像できるが、同時に、別の重要な特徴を持っていることを示すためである。

... *Little Dorrit* and her husband *walked* out of the church alone. They paused for a moment

on the steps of the portico, looking at the fresh perspective of *the street* in the autumn morning sun's bright rays, and they *went down*.

*Went down* into a modest life of usefulness and happiness.... They *went* quietly *down* into the roaring *streets*, inseparable and blessed; and as they *passed* along in sunshine and in shade, the noisy and the eager, and the arrogant and the forward and the vain, fretted, and chafed, and their usual uproar. (801-802)<sup>5</sup> (イタリックは論文筆者による)

都会の喧騒に飲み込まれてしまう二人は、一体どこに行くのか？ J. Hillis Miller はこの結末をハッピー・エンドと考え、”Dickens can imagine Little Dorrit living happily ever after with Arthur Clennam.” (242) と述べるが、”a modest life of usefulness and happiness” と描かれる生活は、あまりに抽象的すぎる。「幸せに暮らしました」という常套句同様、二人の結婚生活は実際に「暮らす」感覚が欠け、代わりに “went,” “passed” “streets” という語群で連想される、「移動」「不定」の感覚が表面に出ている。Little Dorrit の前作 *Bleak House* での Esther とその夫 Allan Woodcourt との生活を表現する、小説の最後の Esther の言葉にも、”We are not rich in the bank, but we have always prospered, and we have quite enough.” (769) と、同様の「つつましい」生活を語る曖昧な表現が述べられる。そのうえで、善意の後援者 John Jarndyce によって準備された新しい *Bleak House* で生活する Esther の “Full seven happy years I have been the mistress of Bleak House.” (767) という、彼女の新しく落ちついた家庭の、最低限の描写が存在するが、*Little Dorrit* の最後にはそれすらなく、むしろ二人はこれからどこかへ旅立つといった感じすら読む者に抱かせるだろう。

F.S. Schwarzbach は、*Little Dorrit* には “a peculiarly distrustful attitude towards earning and having money” (153) があると論じているが、事実、本当に生活するために必要な金銭感覚、そして、その金銭が支える定住した家庭生活の感じが、この二人にはない。その一方、小説構造を分析すると *Little Dorrit* での登場人物の結婚についての特徴ある金銭的背景、つまり、お金に左右された結婚の姿が垣間見られる。Amy (Little) Dorrit の姉 Fanny は、父親 William Dorrit に遺産が転がりこんだおかげで Mr. Sparklar と結婚し、昔ダンサーだった時、彼の母 Mrs. Merdle から受けた侮辱の復讐をする一方、”more convenient” (39) という理由だけで Mr. Flintwinch は Affery と結婚し、能力のない自身を “an ill-conditioned man” (473) と正当化する Henry Gowan は、結婚相手の Minnie Meagles の父に自分の借金を払ってもらう。その Mr. Meagles は “practical people” (17) と自認、自宅に “a pair of brass scales for weighing gold” と “a scoop for shovelling out money” (189) を飾り、”I have been poor enough in my time...or I should have married Mrs. Meagles long before” (19) と資金不足のため結婚ができなかったことを思い出す。

金の存在は、夫婦関係を買うことをも可能にする。遺産を貰って債務者監獄から出た William Dorrit の2番目の妻の座を Mrs. General が狙っていることを Fanny は強く意識し嫌悪するが Fanny が governess である Mrs. General の意図を察知するのは、自身が Society という階段を Mr. Sparkler との結婚で昇ってきただけに、当然だろう。後に Amy も “slight thaw of triumph” (623) を Mrs. General の目に見たと思うわけで、Mrs. General の本心は明らかだ。governess である Mrs. General にとって「勝利」とは、経済的に不利な立場からの脱出であり、それゆえ彼女は、その governess という事実や、給金について触

れられるのを嫌がり、“a companion, protector, Mentor, and friend” (437) “a member of his family.” (438) としての立場を主張する。だが、本当は、彼女は “...an article of that lustrous surface” (438) であり、その「品物」は “worth any money” (438)だから買われたにすぎない。

献身的な娘 Amy Dorrit と、父 William Dorrit の関係も、遺産が入って Mrs. General が介在するようになってから、Amy は認めようとしないうちの、金銭を元にしたものに変質していく。金銭的に困っている時に、若い娘が老人の父（あるいは祖父）に懸命に仕えている姿は *The Old Curiosity Shop* の Little Nell とその祖父にすでに見られるが、その時も Nell の祖父は病的なギャンブル癖で Nell を苦しめる。しかし、*Little Dorrit* に於いては、以下のように、二人の関係はより複雑な側面をみせる。

If the thought ever entered Little Dorrit's head ... that he [her father] could give her up lightly now, in his prosperity, and when he had it in his mind to replace her with a second wife, she drove it away ... and entertained no harder reflection ... than that he now saw everything through their wealth, and through the care he always had upon him that they should continue rich, and grow richer. (591)

ここで暗示されるように、William Dorrit は “wealth”（富）を通して物を見るようになり Amy の役割だった “protector” の役を、資産として購入した Mrs. General に与えようとする。家族の関係も金銭に置き換えができてしまうことが、微妙な言い回しで表現される。こうして金銭に冒された人間関係がこの作品の基調であり、その一番の象徴が Mr. Merdle - - 資産を増やしていると噂され、誰もが近付きたがる人物 - - なのである。

Mr. Merdle に代表される金銭を基盤にした人間関係がある一方で、Amy Dorrit と Arthur Clennam のロマンス、あるいは Amy の恋愛の存在が、その対極の位置にある。二人の関係では、Amy の目から見れば、前述の人間関係とは逆に、金の存在が邪魔になっているのだ。遺産が入って尊大になった父 Dorrit は、Amy を慣れないイタリア旅行に連れ出し、過去の経緯のため Arthur との交際を嫌い、物理的・心理的な距離を Amy と Arthur の間に作ったうえ、彼女の結婚について、“a marriage, eminently calculated to extend the basis of our ...connexion, and to...consolidate our social relations”(590) が望ましいと考える。遺産で得た自身の社会的地位のため（またおそらく、Fanny の Mr. Sparkler との結婚に刺激され）、父 Dorrit は Amy も利用しようとするのだ。

## 2：物語を創ること。

ここで疑問になるのは、もし自らの”Castle in the Air”を作りあげ、Marshalsea 監獄の記憶から遠ざかろうとする William Dorrit が死ななかつたら、Amy はどうなっていたらうか、という点である。Amy は、その物の見方において、父と共通する部分が多く、この二人を引き離すことは不可能だっただろう。もちろん、彼女が忠実に仕える父の言うことに彼女は従ったと考えられなくもないが、この親子の深い結びつきはそんな状況を困難にしている。実際、Amy は、William が作りあげた、自分は紳士だという「空中楼阁」の物語を、非常に強く共有している。施しの金を testimonial と名付け、the Father of the Marshalsea な

る紳士として振舞う William Dorrit から、the Child of the Marshalsea である Amy は不可分の存在となっている。Amy は Arthur に “All that he said was quite true. It all happened just as he related it.” 更に “It is often said that his manners are a true gentleman's and quite a study.” (92) と父について熱く語る。Arthur が泊まった監獄の the Snuggery の粗末なベッドですら、

He [Arthur] noticed that the coffee-house was quite a majestic hotel to her, and that she treasured its reputation.

”I believe it is very expensive,” said Little Dorrit, “but my father has told me that quite beautiful dinners may be got there. And wine,” she added timidly. (91)

と、父の言うことなら何でも信じるかの如く話す Amy にとっては、豪華なものに思えてしまうのだ。

父 Dorrit が、自分は紳士であるという物語を作りあげ、その中に安住しようとするように、娘 Amy も、架空の物語を作ることが得意である。Fanny が監獄の外でダンサーとして働いていることを、伯父と一緒に companion として過ごしているだけと誤魔化し、Book I, Chapter 14 では、夜道を歩くことを “I pretend to-night that I am at a party.” そして “I hope there is no harm in it. I could never have been of any use, I had not pretended a little.” (162) と話す。Amy は、全て苦しいことは、物語にして表現し、自分や他者の心からその苦痛を消そうとするのだ。

このように、自身の（特に苦しい）経験を、物語化してしまう登場人物が、この小説には多く登場し、その場合、事実の一部分を強調、歪曲して、そのまま受けとれない内容に変質させている。その例が、”self tormentor” の Miss Wade であり、Arthur Clennam である。Miss Wade は、自分について語る最初に、”I have the misfortune of not being a fool. From a very early age I have detected what those about me thought they hid from me.” (644) と自身の頭の良さを口にするが、実際は、彼女の物語は、自身への悪意を見いだそうとする欲求によって、どこまで真実かわからなくなっている。確かにわかるのは、Miss Wade は、愛情を感じている相手に、常に自分への敵意を見いだす彼女の性質だ。Miss Wade は、彼女の言葉”Fair words and fair pretences; but I penetrated below those assertions of themselves and depreciations of me...”(646) でわかるように、governess である自分は社会から虐げられているという物語を勝手に設定し、自虐的な行動に出てしまう。こういった意識が、全て妄想とは言い切れないものの、肝心なのは、彼女への愛情の中でも、Miss Wade は常に自分への悪意を探している、ということだ。彼女は永遠に苦痛に閉じこめられ、恋愛を含め、人間関係を維持させることができない。このような自分の偏った意識のため、歪んだ物語を創作してしまう心理は、Arthur の心にも発見できるだろう。

### 3 : Arthur の物語

作品中で、重要な位置を占める Arthur Clennam の場合、その心理が一番顕著に現われるのが、Nobody という存在を心の中に作りあげ、自身の弱さを “Nobody's Weakness” (Book

I, Chapter 16 の表題参照) と言い換えてしまう時だ。Minnie Meagles と恋に落ちないようにしようと決心した時の彼の心は、”Why should he be vexed or sore at heart? It was not his weakness that he had imagined. It was nobody's ... why should it trouble him? And yet it did troubles him.” (194) と、意図的に自分の意志を Nobody の物語に置き換えてしまう。「それでも彼を苦しめた」と締め括られる語り手のレトリックは、Arthur が自分が別の物語を作りあげている事実に気がついていることを示すが、たとえそうだとすると、その別の物語は勢いを増し、やがて真実の一部を彼の目から覆い隠してしまう。Arthur は、Minnie Meagles の結婚相手 Henry Gowan が、彼女に相応しくないと気付きながら、Arthur への Minnie の無理な願い “...use your great influence to keep him [Henry] before papa's mind, free from prejudice and in his real form” (329) を承知してしまう。実際に性格が良くない Henry Gowan への「偏見」こそが、正しい見方であるのに、Minnie は「彼の本当の姿」が理解される日が来ることを信じている。Arthur は彼女が “Self-deceived, mistaken child” (329) だと理解してはいるが、彼自身にもその形容は当てはまるのだ。

こうして、自分に都合のいい物語を作りつつ、Arthur と Amy も、互いの現実の一部分のみに自分の意識を集中させるが、この二人の場合は、Henry Gowan ではなく、Marshalsea の債務者監獄の存在が大きく影を落とす。Book I, Chapter 14 で二人が会話する時 Arthur は Amy の貧しく、小さな外見に目をやるのに対し、Amy は、自分と父親の関係が、Arthur によって誤解されないか、父が彼に悪く思われないか、非常に気にしている。

[Arthur said to Amy,] “Your foot is like marble, my child;” ... It smote upon his heart to feel that she hid her thin, worn shoe.

Little Dorrit was not ashamed of her poor shoes. He knew her story, and it was not that. Little Dorrit had a misgiving that he might blame her father...” (160)

自分の父の言い残した言葉から、自分の一家が誰かを不当に苦しめたのでは、という思いに取りつかれた Arthur にとって、債務者監獄に住む Amy は、その貧しさ、保護すべき子供の姿しかその目に写らない。一方、Amy は the Child of Marshalsea の物語をすでに知っているはずの Arthur が、違う角度でその物語を見る、つまり、父に搾取される娘として彼女を見るのではないかと、不安に思う。こうして、Marshalsea によって具象化された、強い意識が、二人の間に入り込むのだ。

また、Book I, Chapter 32 でも、Arthur の Amy への見方は以前と変化せず、恋に落ちた Amy の気持ちを無視してしまう彼の意識の構造が詳述されている。ここでも、Arthur は彼女の貧しい姿にのみ注意が行ってしまう。

He heard the thrill in her voice, he saw her earnest face, he saw her clear true eyes, he saw the quickened bosom that would have ... thrown itself before him ... with the dying cry, “I love him!” and the remotest suspicion of the truth never dawned upon his mind. No. He saw the devoted little creature with her worn shoes, in her common dress, in her jail-home; a slender child in body, a strong heroine in soul, and the light of her domestic

story made all else dark to him. (374)

Arthur には、Amy の貧しく小さい姿とけなげに生きる魂しか見えない。Arthur は、Amy の物語の一部だけを読んで、彼に恋する彼女の本心を理解できないのだ。一見、Arthur Clennam は、*Bleak House* で、Esther Summerson よりずっと年上で、最後に彼女との結婚を若い Allan Woodcourt に譲ってしまう John Jarndyce を思わせる。大きく違う点は、Jarndyce には、Jarndyce vs Jarndyce 裁判に首を突っ込もうとする Richard を止めようとしたり、Esther が秘かに Allan に想いを寄せていることを読み取ったりするだけの、世間に対する判断力があるのに対して、Arthur Clennam はその能力が欠けていることだ。彼女の貧しい服装や、the Child of the Marshalsea としての生活を通じて彼が創る Amy の物語が、Arthur の、自分の一家が誰かを苦しめた、という疑念 - - これ自体も、Arthur が彼の父親の死の時の言葉から、自ら考えだした、一つの物語 - - と結びつき、“adviser and friend” (374) として自分を見てほしいと Amy に話す Arthur から、いつしか彼女への恋人としての感情を奪っていたとしても不思議ではない。

何よりも Amy にとって障害になるのは、こうして Arthur Clennam が彼女を保護すべき 幼児か子供としてしか考えないことなのだ。Amy 自身、自分の体格の小ささによる不都合は何度も経験していて、その不利さは十分自覚している。Arthur が恋していた Minnie と偶然出会った時も、自分は彼女のようにはなれないと、はっきり認めている。しかし、彼女の自己認識の確かさは、自分を年取った男と考え、二人の間の “the space of years” (374) を強調する Arthur の言葉のために、余計な苦痛を彼女自身に与えてしまう。Arthur は Amy の前で “tender part of life” (374) は終わったと語り、自分の過去を “Being wiser, I counted up my years...and found that I should soon be grey.” (374) と語るが、彼女の体躯の小ささだけが目について、“Little Dorrit” “my child” と、Amy の本心に気付かないまま何度も呼び掛ける彼が、本当に「賢くなった」わけではない。実際には、「自分は馬鹿ではない」と固く信じる “self tormentor” の Miss Wade と同じ過ちを犯していただけなのだ。

#### 4 : Amy の物語

Amy の外見に惑わされ、その小ささしか見えない Arthur よりも、Amy のほうが、金を含む世間の物事についてしっかりした観念を持っている。“Worldly wise in hard and poor necessities” (76) と形容される Amy は、13 才にして独学で文字を読むことと、簿記をつけることを習得、Fanny にはダンスのレッスンを無料でしてくれる教師を捜し出し、自分は針仕事を教えてもらって生計を立てる (Book I, Chapter 7 参照)。そして、彼女の父に遺産が入った時 Arthur は Pancks と一緒になって喜ぶが、Amy 自身はすでに Book I, Chapter 9 で、冷静に、遺産により起きる父への悪影響について “...if such a change could come, it might be anything but a service to him now.” (94) と理解している。その他、Arthur が、遺産が見つかる以前、何も害はないだろう、と軽く考え、William Dorrit の借金に関係あるらしいとされた Mr. Tite Barnacle に会おうと思った時も、すばやく Amy は彼の気持ちを読み、止めさせようとする (Book I, Chapter 9 参照)。

こういう Amy の洞察力の鋭さと、その能力から生み出される物語、具体的には彼女が

イタリアから送る2通の手紙と、彼女が Maggie に語る小さな女性の話を分析すると、Amy の物語にも、Arthur の Nobody と同様、二重構造があることがわかる。第1の手紙で Amy は、イタリアで出会った Minnie について、Arthur が Minnie のことを気遣っている知っているので、夫 Henry Gowan の性格に悩む Minnie の実際の姿をそのまま描くことを避け、‘Her [Minnie’s] words are, “Very well and very happy.”’(457) と2回も念を押して、彼を安心させようとする。「彼女の言葉」は、しかし、Amy 自身の言葉ではなく、Arthur の Nobody の言葉と同様、真実を隠す手段にすぎない。事実、Amy は同じ手紙の別の箇所 “...if I was Mrs. Gowan ... I should feel that I was rather lonely and lost...” (455) と述べて、Amy の目から見た本当の Minnie の姿は、寂しくつらいものだ暗示している。Amy は、それが真実ではないと知りつつ、Arthur に虚偽の物語をすることを厭わない。その傾向は、彼女のイタリアからの2番目の手紙にも見える。

... he [Henry Gowan] must be fond of her [Minnie], and I do not doubt that he is -- but in his way. You know his way, and if it appears as careless and disconcerted in your eyes as it does in mine, I am not wrong in thinking that it might be better suited to her. *If it does not seem so to you, I am quite sure I am wholly mistaken....* (535) (イタリックは論文筆者による)

相手がそう思わないなら、自分が間違っているのだという考え方でわかるように、Amy にとって、Arthur の物の見方こそが、彼女自身の物の見方になるのである。

すでに指摘したように、the Child of the Marshalsea としての Amy の小さく貧しい姿は、Arthur に彼女の一部分だけを見させることにつながるが、その一方で、Amy 自身も Arthur の思い違いを手助けしているのだ。Amy は、Arthur が目にした、昔着ていた自分の服を捨てずに取っておき、Arthur に対して、手紙の中で “What I have to pray and entreat is, that you will never think of me as the daughter of a rich person...[that] you will remember me only as the little shabby girl you protected with so much tenderness...” (457) と、昔のままの姿で記憶して欲しいと彼に願う。

そして、Amy のこういう言葉は、Amy の本心が読めない Arthur が真実に気付かせなくするだけでなく、Arthur が勝手に思い描いた Amy の物語を強化する結果になる。Amy のこの性質は、彼女が Maggie に “a poor little tiny woman” (284) が、遠くへ行ってしまった自分の恋人の影の話をしてやる時、はっきりする。この物語の「小さな女」のように Amy は自分の夢を諦めて、この女が糸を巻くように、自分の物語を Maggie に語ることで、苦痛から逃れようとしている。その一方で、その糸を巻く女の様子を冷静に見ている頭のいい Princess を同時に作りあげることからわかるように、Amy は自分の行為の意味 - - Arthur が Nobody を創作した時と同じ状況 - - を理解しているのだ。Amy は自らの作った物語に囚われ、彼女の気持ちは伝わらずに終わるのだ。(この点、現実を見据えて、自分の感情を隠さない姉の Fanny は、そのような物語を作る気はない。Fanny が Arthur に好意を持ったなら、自分がどう思われるか考えず、自分の気持ちをぶつけたらう。)

Amy はこうして Arthur の作る彼女の物語に従属する一方、前述の通り父 Dorrit の自分は紳士だという虚偽の物語をも共有していた。自己の本心を語らず、しかもこの二つの物

語で期待される立場 - - Arthur に保護される Little Dorrit として、また父を保護する “the Child of the Marshalsea として - - を演じる唯一の場所が、Marshalsea 監獄だったのだ。それ故、父が Amy に結婚を勧める時、彼女は強く昔通り彼と共に残ることを懇願する。父に忠実な彼女は、the Father of the Marshalsea なしでは the Child of the Marshalsea としての自分の物語が成立しないと思っているのだ。だが、もはや the Father of the Marshalsea としての過去の紳士の物語は、不要で重荷となった父 Dorrit は、必死に監獄を忘れて、“Castle in the Air” という自分を紳士とする新しい物語にしがみつくと。だが、金で支えられた幻想、「彼は紳士だ」という「空中楼阁」の物語は崩れ、それによって、Amy は the Father of the Marshalsea の物語から解放されるのである。

こうして最後に Arthur と Amy の関係が、解決されるべき問題として残される。Mr. Merdle への投資に手を出し破産する Arthur は、Book II Chapter 29 で Amy Dorrit と再会するが、その時 Amy は、かつて自分が住んでいた Marshalsea 監獄の一室で Arthur に財産を提供することを申し込むものの、彼はそれを一度は拒否する。

“... If, in bygone days when this was your home ... if I had then known, and told you that I loved and honored you, not as the poor child I used to call you, but as a woman whose true hand would raise me high above myself ... and if I was moderately thriving, and when you are poor; I might have met your noble offer of your fortune....” (739)

「自分が控え目にも金があって、きみが貧しかった時なら」財産の提供を受けただろう、という Arthur の言い分は、大きな論理的矛盾がある。(貧しい人物が、金を持った人に施しをするだろうか?) 結局、ここでも彼は、自分ができなかったこと、貧しい彼女の外見だけに目が行き、ロマンスの対象としての彼女の本质を見なかった自身の過去を、「もし」を繰り返した自身の回想の形で物語化しているのだ。Arthur が言いたいのは、彼の過ちの原因である金銭による関係は、二人の間に存在してはならない、ということだ。もし再び二人の間に金銭の関係が発生すれば、その事実 - - “poor child” と呼び、彼女の生まれにばかり気持ちを向けていた女性から、彼女の生まれた場所で大金を貰ったこと - - にだけ Arthur は目が行って、それを忘れることができず、自責の念に押しつぶされてしまうだろう。Amy Dorrit の過去を知る前、Arthur は、金について “I have seen so little happiness come of money; it has brought within my knowledge so little peace to this house, or to any one belonging to it...” (47) と Mrs. Clennam に対して断言していた。Arthur は、自分の家庭を不幸にしていたものが、Amy との間で同じ役割を演じていたことに、ようやく気付くのだ。

そのため Amy は2度目に彼と再会した時に、その心配のもとを全て Arthur の人生から取り除いてやる。彼女はまず、“I have nothing in the world. I am as poor as when I lived here.... O dearest and best, are you quite sure you will not share my fortune with me now?” (792) と言って、彼と自分と間に何の金銭関係もないことをはっきりさせ、Arthur が彼女の申し出を受け入れることを可能にしてやる。もちろん、Amy と Arthur の二人とて、何の経済的裏付けなしに一緒になったのではないだろう(実際 Arthur は他から資金を得て債務者監獄から出してもらっている)が、その事実はいくまで横に置かれている。最後の場面で強調されるのは、二人のロマンスであり、*Bleak House* とは逆に、財産放棄で終わるその

隠れた意味なのだ。同時に Amy は、Arthur の過去の秘密 - - 彼の一家が Dorrit 一家の没落の原因になったと悩むもともなった、その原因の遺言補足書 - - を、Arthur が自分の手で焼くことを望む。

“Only this folded paper. If you will put it in the fire with your own hand ... my fancy will be gratified.”

“Superstitious, darling Little Dorrit? Is it a charm? ... Does the charm want any words to be said?” asked Arthur, as he held the paper over the flame. “You can say (if you don't mind) ‘I love you!’” answered Little Dorrit. So he said it, and the paper burned away. (798-801)

Arthur の悩みは、結局根拠があったのだが、その根源を彼に焼かせることで、最後まで残った金銭という二人を引き離してきた影が消えてしまう。Arthur が知らないうちに、実は本当だった Arthur が記憶する Dorrit 一家への過ちの物語は彼の目の前から消え、Amy が口を閉ざす限り、Amy の本当の姿から彼の目をそらせた、Amy の the child of the Marshalsea としての物語は永遠に封印されるだろう。Arthur の記憶した物語を消し去る Amy の「魔法」と、彼の “I love you!” の言葉で Arthur の新しい物語が始まるのだ。

結論：新しい物語

ここで最後に、本論の始めで述べた、Arthur と Amy の新しい生活 “a modest life of usefulness and happiness” に戻りたい。抽象的なこの句は、新婚の二人を取り巻く人々の喧騒、“the arrogant and the forward and the vain” と描かれた周囲の世界と対立して意味を持つものだ。Mr. Merdle が体現する金と、それに結びついた人の傲慢さに対立して、Arthur を救った、彼に忠実なヒロイン Amy の存在の意味がある。「つつましい生活」をやり繰りし、金銭にわずらわされないで生きていく新しい生活とはあまりに出来すぎであるが、ディケンズにはその具体的内容は頭がない。作家にとって、Arthur Clennam の記憶に焼き付いた Clennam 一家の過去の物語と、the Child of the Marshalsea として生まれた Amy Dorrit の過去の物語が消え去って、まだ見ぬ新しい物語の可能性が示せればそれで良かったのだ。

だが、最後の問題が残る。それは、Amy が父 Dorrit に、自分が監獄の外で働いていたことを隠していたように、あるいは Arthur に黙って遺言補足書を焼かせたように、“Little Dorrit's biographer”(lix)と作品序文で自己紹介したディケンズも、Amy の物語を正しく話していないのかもしれない。Gat's Hill Place を買い取ってしまうイギリスで当時（そして今も）一番人気のある作家が、つつましい生活など得られるだろうか。妻との仲が冷えきって別居寸前の中年男性が、幸せな家庭など手にできるだろうか。Little Dorrit の物語の最後で Amy は、彼女と Arthur の結婚式を、かつて Maggie と二人で夜道をさまよった日に、泊めてもらった教会の牧師にあげてもらう。牧師は、Amy を教会の登記簿を枕にして寝かせてやったことを思い出し、次のように言う。

... said Little Dorrit's old friend, “this young lady is one of our curiosities, and has now come

to the third volume of *Our Registers*. Her birth is in what I call the first volume; she lay asleep on this very floor, with her pretty head on what I call the second volume; and she's now a-writing her little name as a bride, in what I call the third volume. (801)

当時の出版形式の3巻本の形を借り、ディケンズは Amy の人生を描いてきたのだ。Arthur の人生最悪の時に希望を与える献身的な Amy Dorrit の物語は、Amy の出生と苦痛、あるいは彼女の苦しみ始まりと絶望の物語である最初の2巻までは小説中で語られたが、最後の第3巻は結婚の署名の短い行為だけで終わる。ほぼ空白の第3巻で終了する不完全なはずの Amy の物語は、曖昧な “a modest life of usefulness and happiness” という表現と共に、完全な作品 *Little Dorrit* として出版される。幸福感にあふれる Amy の花嫁姿には、未だ語られない物語を未来に控えた、旅立ちの感覚が残るのも当然だ。ちょうど Arthur が Nobody の物語として、自分の感情を切り離し、他者の物語とした時、あるいは Amy が Arthur に向けて、手紙で Minnie は幸福だと語った時、両者とも、実際は自分の本心を理解して、そのような架空の物語に逃げ込む心の動きを内心は察知していたように、ディケンズも Amy のような存在を作りあげつつ、その未来の描写を最低限に抑え、Amy も含め登場人物の多くを「空中楼阁」に閉じこめることで、彼の理想、あるいは幻想に、自ら抑制をかけていたのではなかろうか。そして、その抑制された作家の感情、幸福なはずの未来の描写を最小限に抑える穏やかな諦観が、最後にはうまく終わる恋愛が物語の中心となっている作品の、その全体の暗い調子に、更に説得力を持たせているのだ。

#### 注

1 Trilling は “[*Little Dorrit*] is about society in relation to the individual human will.” (vi) としたうえで Freud や Dostoevski を持ち出して、作品の暗さを説明し、Miller は監獄のイメージに加えて、“the image of a labyrinth and the image of life as a journey” (232) について述べ、登場人物が囚われた終わりなき彷徨という暗い世界観とそこからの解放の可能性について分析した一方、Showalter はフェミニズム批評の立場から、shadow あるいは double として対比された別の人物群に託された、Amy や Arthur といった登場人物の抑圧された欲望、性的な活力について論じている。

2 都市の暗いイメージと *Little Dorrit* の関連は Schwarzbach 151-171 を参照。

3 The Circumlocution Office と Mr. Merdle の実在のモデルについて、簡潔な報告は、Sucksmith viii を参照。

4 ディケンズの心を暗くしたことは当然他にもあった。Wilson は、初恋の女性 MariaBeadnell との再会と幻滅、作家の自身の子供たちの将来への不安を挙げている。Wilson 47-49 参照。

5 以後 *Little Dorrit* からの引用は Clarendon 版により括弧内にその頁数を付す。

#### WORKS CITED

- Dickens, Charles. *Bleak House*. 1853. New York: W. W. Norton & Company, 1977.
- . *Little Dorrit*. 1857. Oxford: Oxford University Press, 1979.
- Miller, J. Hillis. *Charles Dickens: The World of His Novels*. London: Oxford University Press, 1958.
- Schwarzbach, F.S. *Dickens and the City*. London: The Athlone Press, 1979.
- Showalter, Elaine. "Guilt, Authority, and the Shadows of *Little Dorrit*." *Nineteenth-Century Fiction* 14 (1979): 36-79.
- Sucksmith, Harvey Peter. Introduction. *Little Dorrit*. By Charles Dickens. Oxford: Oxford University Press, 1982. vii-xiv.
- Trilling, Lionel. Introduction. *Little Dorrit*. By Charles Dickens. Oxford: Oxford University Press, 1953. v-xvi.
- Wilson, Edmund. *The Wound and the Bow*. Athens: Ohio University Press, 1997.

#### 掲載紀要

『主流』61号 2000年3月発行 同志社大学英文学会 pp.33-50.